

「物語」に関わる人文社会科学の系譜と その公共政策的意義

藤井 聡¹，長谷川大貴²，中野剛志³，羽鳥剛史⁴

¹正会員 京都大学教授 都市社会工学専攻（〒615-8540 京都市西京区京都大学桂4）
E-mail:fujii@trans.kuciv.kyoto-u.ac.jp

²学生会員 京都大学 都市社会工学専攻（〒615-8540 京都市西京区京都大学桂4）
E-mail:hasegawa@trans.kuciv.kyoto-u.ac.jp

³非会員 京都大学助教 都市社会工学専攻（〒615-8540 京都市西京区京都大学桂4）
E-mail:nakano@trans.kuciv.kyoto-u.ac.jp

⁴正会員 東京工業大学助教 土木工学専攻（〒152-8552 東京都目黒区大岡山2-12-1-M1-11）
E-mail:hatori@plan.cv.titech.ac.jp

人文社会科学では、「物語」（narrative）は、人間、あるいは人間が織りなす社会の動態を理解するにあたって重要な役割を担うものと見なされてきている。それ故、人間や社会を対象として、その動態に、公共的な観点からより望ましい方向に向けた影響を及ぼさんと志す“公共政策”全般においても、“物語”は重大な役割を担い得る。ついては、本研究では物語に関する基礎的な人文社会科学的研究である、西洋哲学、解釈学、歴史学、歴史哲学、文芸批評、心理学、臨床心理学・社会学、民俗学などの主たる学術系譜のそれぞれをレビューすることを通して、プラグマティックな観点から“物語”がどのように公共政策に援用可能であるのかを論ずる。

Key Words : narrative, hermeneutics, forllore, narrative psychology, history philosophy

1. はじめに

人文社会科学では、「物語」（narrative）は、様々な形で研究の対象となってきた。物語を直接取り扱う文学は言うに及ばず、歴史学においては、歴史とはそもそも物語であるという認識に基づいた様々な論考が重ねられているし、心理学においても「物語」が、人々の行動や記憶、心理に大きな影響を及ぼすことが様々な明らかにされている。あるいは、社会学においても社会の動態を明らかにするにあたって、人々の間の物語の共有が重要な役割を担うことが論じられているし、西洋哲学の系譜の中でも、人間の活力の根底に物語が潜在していることも含意されている。

このように、人文社会科学においては人間、あるいは人間が織りなす社会の動態を理解するにあたって、物語は重要な役割を担うものと見なされてきている。この点を踏まえるなら、人間、そして社会を対象として、その動態に、公共的な観点からより望ましい方向に向けた影響を及ぼさんと志す“公共政策”全般においても、“物

語”は重大な役割を担い得ると考えることは、至って必然的な思考であると言わねばならないであろう。例えば、様々な困難に巡り会いながらも、それら一つ一つを乗り越えながら公共的に意義ある業績を為した人物の“物語”を描写し、それを公共政策の実践者が読了することには、その実践者達のその後の実践に肯定的な影響を及ぼす可能性は十二分に想像しうるものであろう。

しかし、後に述べるように“物語”に関わる人文社会科学の幅の広がりやを踏まえるなら、公共政策において“物語”という構成概念を活用する方途には、様々なものが存在しうるということが考えられる。ところが、そうした物語の活用方途としてどのようなものが考えられるのかについては、必ずしも明らかではない。本研究はまさにこの点に着目し、これまで人文社会科学の諸研究分野における“物語”に関わる議論、ならびにそれらの研究にて明らかにされてきている諸種の知見を包括的にレビューした上で、それらの議論や知見に基づいて、プラグマティックな観点から“物語”がどのように公共政策に援用可能であるのかを論ずるものである。

さて、本研究において物語に関わる諸研究をレビューするにあたっては、それらの諸研究を以下の3つに分類する。

- ①物語を直接扱う人文社会科学研究：歴史学、歴史哲学、文芸批評、心理学
- ②物語と関連する人文社会科学研究：西洋哲学、解釈学
- ③物語を活用する実践研究：臨床心理学・社会学、リスク心理学、経済・経営学、民俗学、土木・都市計画

以下、本稿ではまず、こうした3分類のそれぞれについて既往研究の議論、知見を取りまとめることとする。

なお、これらの内、①、②は物語に関する基礎的な人文社会科学研究である一方で、③は、①や②の諸議論、諸理論を様々な活用しながら展開されているものである。それ故、本稿が目的としている「プラグマティックな観点から“物語”がどのように公共政策に援用可能であるのかを論ずる」上で、重要な位置を占めるレビューとなるものである。ついては、以上の3分類のレビューを踏まえてレビューを総括した上で、最終章において、この③のレビューにおいても見いだされない様な、物語の公共政策への活用方法を含めた議論を行う。

2. 物語を直接扱う人文社会科学研究

「物語を直接扱う人文社会科学研究」には、主として、以下の3つの系譜が認められる。

- ①歴史学／歴史哲学
- ②文芸批評
- ③心理学

以下、それぞれの系譜の既往研究をレビューする。

(1) 歴史学／歴史哲学

歴史学、あるいは、歴史哲学においては、「歴史とは何か」という問いを、「物語」を通じて理解・解釈しようとする試みが重ねられてきている。

一般に、物理学を代表とする自然科学は、「論理実証主義」を援用することが一般的である¹⁾。ここに論理実証主義とは、いわゆる、物理学を代表とする自然科学における標準的な考え方で、観察された事実を蓄積し、それら事実間に何らかの因果関係を見出し、そして一般化して普遍的な法則を抽出しようとするものである。

しかし、原理的に反復ややり直しや実験操作が不能な、原理的に“一回”しか生起し得ないという本質的な性質を持つ“歴史”を対象とする歴史学は、反復や実験操作が前提とされる論理実証主義は必ずしも援用することが、宿命的に不可能であった。したがって、歴史学の認識を根拠付ける事を主たるつとめとする“歴史哲学”は、論

理実証主義的科学観に対抗して歴史的認識を正当化することが必然的に必要とされたのであった。そしてその帰結として、歴史哲学が、歴史的認識のために不可欠であると見なした構成概念が、“物語”だったのである。

例えば Mink (1974)²⁾ は、人間に関わる出来事（例えば、歴史的出来事）は、必然的に何らかの“意味”を帯びざるを得ぬものであり、したがって、“解釈”の帰結としてしか得られ得ぬものであると論じている。そして、その“解釈”の行為は、常に、様々な出来事の要素を、時間軸にそって何らかの意味ある構造へと再配置するものであるということを指摘している。そして彼は、こうして複数の出来事が構造化された全体のまとまりを“物語”と呼称している。そして、歴史学とは、様々な出来事を構造化していく営みであると捉えている。すなわち、彼によれば、歴史学とは、解釈行為を通じて歴史的な物語を構成／構築していく営みであると定位しているのである。

Mink からさらに遡ると Danto (1964)³⁾ もまた、同様の主張を展開している。彼は歴史学の仕事を「解釈」を通じて出来事の「意味」を探究する事であると捉えている。そして彼は、意味というものは「出来事が、それら自身を構成要素とするより大きな時間的構造に関連づけられるとき」に見出されるものであり、それ故に、出来事は物語という大きな枠組みの中に位置づけられてはじめて意味を帯びると主張している。そしてさらに、ある出来事の意味を物語の中に位置づけるためには“文脈”が必要となり、それゆえに事後的に振り返って記述する事となる、と言う点を指摘している。それ故、記述の際には事後的な視点からの取捨選択と配列・構造化が加えられることとなるのである。後に White(1973)⁴⁾もまた指摘したように、歴史を記述するにあたってもし物語がなければ、出来事の記述は単なる年表となってしまう意味を失ってしまうのである。

例えば、「セルビアに響いた一発の銃声が第一次大戦の引き金を引いた」という論述を考えてみよう。この論述で言及されている「セルビアで一発の銃声が響いた」という“出来事”は、それだけを抽出してみれば、「銃声が響いた」という以上の意味を帯びるものではない。しかし、その銃声が鳴り響いたという小さな一つの事実をあえて“選択”し、その後の第一次世界大戦という大きな“文脈”の中に位置づけることではじめて、その重大な“意味”が浮かび上がることとなるのである。

このように、歴史というものは常に“物語性”をまとうものではあるが、全ての物語が歴史と過不足なく重なり合うかどうかと言えば、必ずしもそうではないと言う点に留意すべきである。例えば Ricoeur(1987)⁵⁾は、両者の相違点として、以下の三点をあげている。

- ① 歴史においては概念化や客観性を要求され、そ

の水準での批判にさらされる一方、非歴史的な物語においては必ずしもそうした批判にはさらされない。

- ② 非歴史的な物語においては、登場人物は必ずしも存在しないが、歴史においては存在することが要請される。
- ③ 非歴史的な物語においては、行動主体となる人間にとっての時間と実際の時間とが異なるが、歴史においてはその両者は乖離しないことが前提である。

こうした点から、彼は、歴史は（論理実証的な）法則による説明と、“筋立て”による理解の中間に位置するものである、と指摘している。すなわち、歴史における登場人物は実際の国民や国家であり、時間は歴史的な出来事の時間でなければならないのである。なお、彼は物語られる出来事は、最終的な「結末」から振り返って納得のいく形に構成されていなければならない、という大きな特徴を持っているという興味深い指摘をしている。

このように、歴史学、歴史哲学は、“歴史”というものは、単なる客観的な事実の羅列ではなく、そうした客観的な諸事実を契機として織りなされる一つの“物語”であると見なさざるを得ないものなのである、という見解が支持されてきたのである。

（２）文芸批評

文芸批評とは、文学や神話等の“物語”を評論し、人間や社会の有り様に新たな解釈を加えんとする知的活動を言うものである。

例えば、ジョルジュポルティ⁶⁾は 20 世紀初頭に、「The Thirty-Six Dramatic Situations」の中で、様々な古典文学を網羅的に分析した結果、劇的な状況とはたった 36 種類しか存在しておらず、それらが様々な名前や細部を代えながら、人類史を通じて何度も繰り返し語り直されてきているという点を指摘している（哀願・嘆願救助・救済、復讐、近親間の復讐、逃走・追跡、苦難、残酷なまたは不幸な渦に巻き込まれる場合、反抗・謀反、戦い、誘拐、不審な人物または問題、目的への努力、近親間の憎悪、近親間の争い、姦通から生じる残虐、精神錯乱、運命的な手抜き・浅慮、知らずに犯す愛欲の罪、知らずに犯す近親者の殺傷、理想のための自己犠牲、近親者のための自己犠牲、情熱のために犠牲、愛する者を犠牲にする場合、三角関係、姦通、不倫な恋愛関係、愛する者の不名誉の発見、愛人との間に横たわる障害、敵を愛する場合、大望・野心、神に背く争い、誤った嫉妬、誤った判断、悔恨、失われた者の探索と発見、愛する者の喪失）。

同様に、ロベルト・トバイアス⁷⁾は根源的なプロット（脚本）はたったの 20 種類しか存在しないと述べてい

る（探求、冒険、追跡、救出、脱出、復讐、謎、競争、負け犬、誘惑、変身、変化、成熟、愛、禁断の愛、犠牲、発見、過剰の不幸、上昇、下降）。

こうした文芸批評の中でも、とりわけ 20 世紀に展開されたレヴィストロース⁸⁾による「構造主義」に基づく物語の分析、ならびにそれを引き継ぐ「ポスト構造主義」に基づく思想的系譜（例えば、文献⁹⁾¹⁰⁾）は、対象とする物語を批評するに留まらず、その物語がつけられた“社会”そのものについて、積極的に深い理解を得んとする営みであった。

例えば、レヴィストロースは「構造人類学」の中で、ギリシャ神話におけるオディプス神話の構造分析を試み、そこで対立しながらも反復される一群の関係を見出している。それぞれの関係の根底には、現実には解消不可能な矛盾（父と息子の、一人の女性[母=妻]を巡る葛藤、等）が存在し、物語のなかで形を変えて繰り返される対立は、その矛盾の置き換えであることを指摘している。つまり現実的に解決不可能な矛盾を絶えず別のものへと置き換え、そのつど暫定的な解決を与えるものとして、その神話を読み解いている。しかしこれはあくまで暫定的な解決にしか過ぎず、常に新たな置き換えが必要となり、その置き換えは現実的な矛盾が意味を失うまで螺旋状に発展する。すなわちこの事は、神話、ひいては社会の中で認知され、共有されている物語というものは、現実社会に潜在する矛盾を、別のものに置き換え、それを通じて、現実社会に潜在するその物語そのものを“隠蔽”するという機能を持っていることを意味している。

こうした“物語による隠蔽”という側面は、先に述べた歴史哲学、あるいは、後に述べる心理学で強調されているように、首尾一貫性を確保するために、出来事を取“捨”選択し、構造化する特徴を持っているという指摘からも必然的に示唆される。つまり、この構造化の裏には選ばれなかった出来事、捨てられた出来事が累々と潜在しているのである。しかも、物語に取り入れられた出来事は大いに注目されるのであるから、捨てられた出来事は、そもそもそこに存在しなかったものであるかのようになすりかわってしまうのである。そしてそうした隠蔽によって、語られた物語があたかも“自然”に装われることとなるのである。

なお、この「排除・隠蔽」の対象は二つに大別することができる¹¹⁾。一つは「矛盾の隠蔽」であり、これは、先に引用したレヴィストロースが指摘したものである。そしてもう一つの矛盾は、「可能性の隠蔽」である。これは「別の物語になり得た可能性の隠蔽」であり、ポスト構造主義の系譜に位置づけられるバルトによって論じられている^{9) 10)}。

バルトが「神話作用」⁹⁾以来一貫して分析の対象としてきたのが、可能性を隠蔽する事で自然性を装う“神

話”（という物語）の力であった。そしてこの自然性を装う物語の力は物語の「冒頭」においてこそ、遺憾なく発揮される、という点を指摘している。“語り始め”とはすなわち“沈黙”からの離脱であるが、そんな離脱は、どんなところからでも可能である。つまり特定の地点から語り始める必然性は、取り立ててないのである。そして、物語は、その“語り始め”に大いに依存するものであるから、異なるところから語り始める事で今語られている物語とは全く異なった物語になり得るのである。かくして、今語られている物語が如何に自然性を装うものであったとしても、それとは異なる物語は、常に存在し得るのである。逆に言うなら、今語られている物語の自然性、必然性は、そうした可能なる物語を隠蔽して初めて獲得され得るものなのである。

この様にして、文芸批評は、20世紀以降の構造主義、ポスト構造主義の議論の中で、物語が成立する過程そのものに潜む“隠蔽の構造”を浮き彫りとしてきたのである。

（3）心理学

心理学は、人間の心的現象を研究対象とする人文社会科学であるが、“物語”が人間の心理現象において演ずる役割も様々な形で分析されてきている。

まず、人間の認知活動に着目した研究においては、Bruner^{12)・13)}は、“物語”は、人間が物事を理解したり思考する際の重要な方式となっていることを指摘している。彼は、人間の認識形式/思考形式には、「論理実証モード」(paradigmatic mode)と「物語モード」(narrative mode)の二種類が存在していることを指摘している¹²⁾。論理実証モードとは自然科学に代表される認知・思考形式であり「記述や説明に関する形式的な数理体系の理念」や「一貫性と無矛盾性という必要条件」を特徴としている。そして「物語モード」は「見事なストーリー、人の心を引きつけるドラマ、信じるに足る歴史的説明をもたらす」特徴を有すると述べている。いわゆる科学的な理解をもたらすのが論理実証モードであり、物語による感慨や感動をもたらすのが物語モードである。彼は、これら両者は相互に還元不可能である点を指摘している。

そして、「論理実証モード」は個別事象ではなく、高度な抽象化によって個別事例を越えて経験的真理を立証しようとするため、その理解や認識は、必ずしも各人の実体験に直接関連づけられるものではない。ところが、「物語モード」は時間を超越した事例を個別の経験例へと解釈し、特定の時間と場所へと位置づけ、「信じるに足る説明」をもたらすものである。それ故、物語モードにおける理解や認識は、各人の実体験に関連づけられ、より直接的に、人間の意図や行為に影響を及ぼしうる。その意味に於いて、人間の行為や実践において、「物語

モード」はより重要な役割を演ずるものであるという点が指摘されている¹¹⁾。

さらに、Brunerは物語には以下の五つの特徴があるという点を指摘している¹⁴⁾。

1. 時間軸にそって出来事を構造化する
2. 語られた出来事が事実か否かには関心が無い
3. 相互行為の中で生じた人々の「規範逸脱」をうまく理解出来るように説明する（例：言い訳）
4. 登場人物は一連の行為の背後に独特の意識の動きをもっている
5. 物語の習得や実践は常に「相互行為」の中で、様々な他者を相手にして行われる。

さて、こうした Bruner の人間の認知活動に関わる基本的な物語の役割に関する一連の研究に影響を受けながら、物語についての心理学は様々な発展している。

第一に、Gerge & Gergen は、自分とはこんな存在なのであるという“自己認識”は、物語的に構成される、という自己物語論を主張している^{15)・16)・17)}。ここに言う、Gergen 達の「自己物語」とは、「個人が自分にとって有意味な事象の関係を時間軸にそって説明する事¹⁵⁾」である。つまり「到達点、すなわち有意味な終点を設定し、その終点に向かって諸出来事を取捨選択、そして配列する」¹⁶⁾という過程を経ることで、語り手の人生には一貫性が与えらると共に、現在の生の“意味”と“方向性”の感覚がもたらされることとなるのである。

第二に、Schank & Abelson¹⁸⁾は、認知活動の中でもとりわけ重大な役割を担う“記憶”において、物語が果たす役割を論じている。彼らは、ものごとは物語としてしか記憶され得ない、と主張している。記憶は“語る”事を通して定着し、また変容もする。人間は“語る”際に自分の思う結末に向かって、また人に受けいれてもらえるようにその文化や社会に存在するひな形 (skeleton) にそって、物語を構成していく。

この際に、物語は抽象化され、短縮化の行程を経て形成されるため、詳細な部分が抜け落ちてしまうのだが、その抜け落ちた部分は、物語の一貫性を保つ形で、そして物語の結末や物語によって伝えたい感情・内容に合致するように構成されていく。こうして構成された“事実に関する記憶”は、しばしば、当の事実と必ずしも一致しないという事態すらが生ずることとなる。こうして、語られた物語が記憶される際には、より単純化する為に“索引化”される。そしてその索引化は信念（例えば、UFO のような存在に関わる信念や、イデオロギーに関する信念など）の影響を受ける。何故なら、物語するという行為は上記のように絶えざる取捨選択と構造化を行うものであるが、そうした取捨選択や構造化は、彼の信念に基づいて、あるいは、信念を擁護する方向へ向かって、なされるものだからである。一方で、それぞれの物語

の方向を規定していく信念もまた、個々の物語によって正当化され、自身の物語の中に一貫性を保った形で居場所を見出す。そのため、物語と信念は循環する関係にならざるを得ない。

彼らはさらに、この様にして形成された“索引”の概念を用いて、“理解”とは何かを論じている。彼らによれば、そもそも“理解”，つまり“分かった”と思う，“附に落ちる”という認知活動は、理解の対象としている“物語化された出来事”が、彼の“索引”のいずれかに合致することなのだ論じている。ただし、人々はその“合致”つまり“理解”が“正しいのか否か”を確認すべく、正しく理解出来ていると見なせる追加的な証拠を集めようとする。そして、正しく理解したと考えれば考える程に、その“理解”された新しい物語は、彼が持つ“旧来から知っている物語”，そして“信念”や“索引”のかたちにインパクトを与えることとなる。

この様に、個人の記憶や理解といった認知活動に物語は決定的な役割を担っているという議論に加えて、複数個人が関わる“共有認識”にも重大な役割を担っているという点が、Miller¹⁹⁾によって指摘されている。これが、心理学における第三の発展的理論である。彼は、物語は個々の人間にのみ存在するものではなく、社会やコミュニティにおいて共有されている事を指摘している。しかも、社会的に共有された物語は個々人が新たな出来事や知識を解釈するための“起点”となるものであると論じている。それ故、社会的に共有された物語は、その構成員の個々人の意思決定や判断において何を重要視して何を捨て去るのかを指示することとなるのであり、これこそが、社会的に共有された価値観の本質であるという点が指摘されている。また、物語はより簡潔な表現と結びつくため、物や行動やしきたりが物語の見出しの役割を果たすようになり、伝える機能や記憶を強化する機能を果たす。それゆえ、国旗や国歌や像や公共の建物やシンボルマーク(例えば、ハーケンクロイツ等)は“国の物語”にとって何が重要で何が重要でないのかを表すこととなる。

なお、こうした物語の社会的共有は、職場などの具体的な集団における“新人研修”において重要な役割を担っていることが、Lave & Wenger²⁰⁾によって指摘されている。

3. 物語と関連する人文社会科学研究

「物語と関連する人文社会科学研究」には、主として、以下2つの系譜が認められる。

①西洋哲学

②解釈学

以下、それぞれの系譜の既往研究をレビューする。

(1) 西洋哲学

言葉の意味は、古くから外延(対象)や内包(共通性)で説明されてきたが、オーストリアの哲学者ウィトゲンシュタインは、「言語ゲーム」，すなわち「その言葉を活用する一連の行為連関態」によってはじめて、その意味が浮かびあがることとなる，という新しい言語哲学を提唱した²¹⁾。例えば、金槌は、金槌を使って釘を打つという目的ある行為(すなわち、言語ゲーム)があつてはじめて、意味が付与されるのであって、そうした行為がこの世に一切存在していなければ、それは単なる鉄と木でできた物質にしか過ぎず，“金槌”という意味がその物資に付与されることはあり得ない。そうした「金槌を使って釘を打つ」という言語ゲームを、一連の「物語」と解釈するのなら、言語の起源は全て物語にある，ということができる。

同様の主張として、後に述べるハイデガーが現象学的に論じた「世界」という考え方も、この言語ゲームと重なるものである²²⁾。ハイデガーが言う「世界」とは、人間(＝現存在)が物心がついたところには投げ出されていた(＝被投されていた)場そのものを意味するものであり、人間は(世界内存在として)その「世界」に、様々な意味を付与(＝投企)している，というのが、ハイデガーの主張である。そして、この世界の中で人間は、ポール・ヴァレリーが論じたように、現在のみならず、過去と未来といった「時間性」を持ちながら在り続ける(現)存在である。そしてこの「時間性」は、人間＝現存在以外はつくりだせるものではなく、人間＝現存在のみが“つくりだす”ことができるものであり、この“時間性をつくり出す”という契機は人間が“物語る”という行為の内にはじめて現れる，という点を彼は論じている。例えば彼は、「一般的に言うと、物語りつつ、口頭においてであれ記述においてであれ、あるいは考え込むという形においてであれ、私に起こったことが知へと取得される」と述べている。つまり、ハイデガー哲学においてもウィトゲンシュタインと同様に、「物語」こそが、時間性や意味をつくりだす契機となっていると考えることができるのである。

さらにハイデガーは、この時間性についても、自らの死を先駆する時間性こそが“本来的時間性”であり、そうでない時間性は“非本来的時間性”であると述べる。このことは、自らの死を認識しつつ(死に気遣いながら)語られる物語こそが、「本来的な物語」であり、それに基づいてつくりだされる時間性や意味こそが本来的なものであることを含意している。その一方で、自らの死を全く想定しないまま語られる物語は非本来的な物語であり、それに基づく時間性も意味も非本来的なるものであることを含意している。

さらに、パースや、デューイ、ジェームズらの「プラグマティズム」²³⁾も、言語ゲームの考え方と基本的に同様の構造を持っている。ここにプラグマティズムとは、アメリカのパースによって生み出され、同じくアメリカのデューイ、ジェームズ、ミードらによって展開された哲学的系譜である。その基本的な考えは、哲学的、思想的な概念はいずれも、「その概念が如何に道具として役立っているのかという事態」があつてはじめて、意味を持ちうるものであり、そうした事態を必要としない純然たる概念などあり得ない、というものである。ここで、その「その概念が如何に道具として役立っているのかという事態」は、ウィトゲンシュタインが言う「言語ゲーム」と同一のものと解釈しうるものであり、したがって、それを「物語」と解釈することも可能である。この解釈に基づくなら、プラグマティズムもまた、全ての哲学的思弁的概念の源泉に物語があるということを暗示する立場だと言いうことができる。

なお、こうした「物語」の中でもとりわけ歴史や伝統の中で共有されたものが、繰り返しとなるがウィトゲンシュタインが論じた言語を演繹しうる「言語ゲーム」と言えるであろうし、精神医学のユングが言うところの集合的無意識とも言えると考えられる²⁴⁾。

(2) 解釈学

解釈学はそもそも、ギリシャの詩人ホメロスの詩句や聖書といった古典的テキストを「正しく」解釈するための文献学的な理論や技術論にその起源を持つものであるが、19世紀の神学者シュライエルマッハー²⁵⁾によって体系化され、それ以後のディルタイ²⁶⁾、ハイデガー²⁷⁾、ガダマー²⁷⁾といったドイツ語圏の哲学者らによって、古典文献を含むあらゆる「人間の精神活動の所産」を「解釈」するための理論を研究する学問として発展された、西洋哲学の一領域である。その中で、「解釈」ということは、人間にとって、ひいては、人間精神にとってどういう意味をもつか、ということが様々に論考されてきた。

まず、シュライエルマッハー²⁵⁾は、古典テキストにおいて、語る者が目前にあり、その精神的存在のすべてが賭けられているような生き生きとした表現こそが、彼の「生の瞬間」に対する理解を促すという点を指摘している。そうした話し手による生の表現とそれに対する聞き手の理解を通じて、両者の間で共感的な理解が達成され得るのであり、ここに解釈の目指すところがあるということを論じている。

こうした考え方はディルタイ²⁶⁾においても共有されている。ディルタイは、「解釈」というものを、「解釈者が話し手の心理状態に自己移入し、その経験を追体験・追構成することを通じて、話し手の意図と精神の有

り様を理解すること」を意味するものとして捉えている。それ故、この様な解釈の過程を通じて、解釈者は話し手と「生を共にする」ことが可能となる。そしてこの「共同的な営み」によって、個人の間に成り立つ共同性が確認されるとともに、「この共同的なるものの内に諸個人を組み入れることが出来る」のである。心理学におけるMillerが、「物語の共有」が社会的規範や社会的価値を規定するものであると論じていることを先に述べたが、このディルタイの指摘は、Millerのそれと同様の事態を含意していると言うことができる。いずれにしても、こうした共同経験を通じて、話し手の思想や意志が聞き手に伝染し、その結果、話し手の言明やテキストに「ひとを激励する力」が生じると、ディルタイは述べている。

この様に、ディルタイやシュライエルマッハーにおいて、解釈とは、ただ単に相手の心情を理解するというだけには留まらず、それを通じて、人々の間で「共感的理解」を促進するとともに、「共同性」を維持・強化し、そして、意志や活力が伝達されるといった、人間の生や活力を支える根幹にあるものとして位置付けられているのである。

さらに、ハイデガーは、あらゆる理解には本質的に先入見が関わっていることを指摘している。いかなる理解も、それに先立つ先入観から完全に独立であることは不可能であり、何らかの先入観に基づいて理解を構成せざるを得ない。そのため、そうした理解において、事柄に適切な、正しい先入見を練り上げていくことが、その不断の課題であるとハイデガーは論じている。ただし、その先入見は、過去の経験やテキストの解釈に基づいて見直され、練り上げられるのである。そして、その過去の解釈もまた、その時点における先入見に基づいて為される。つまり、解釈によってはじめて先入見が練り上げられていくこととなると共に、その練り上げられた先入見によってはじめて、新たな解釈が与えられることになる、という循環的な形でしか、人間は、解釈も、先入見の練り上げも不能なのである。ハイデガーは、こうした「解釈」と「先入見」の間の循環的な関係を解釈学的循環と呼称し、この解釈学的循環から人間は逃れ得ないのだと論じている。

このように、シュライエルマッハーやディルタイ、あるいは、ハイデガーによる解釈学的論考は、人間の生や活力、ひいては人間存在の本質的条件を考える上で、「解釈」という行為は極めて重大な本質的な役割を担うことを意味している。

ここで、「物語」と解釈との関連を考えるなら、次のように言える。

まず、「物語る」という語り手の行為は、自身や他者、私たちや彼らの精神の所産（例えば、自他の経験実践など）、解釈学的循環の中で、「解釈」しつつ「表現」し

ていく行為である。つまり、物語するという行為が不可避免的に「解釈」を含むのであり、それ故に、その物語は、話者の精神の活力に直接的に繋がるものである。

一方で、その「物語」の聞き手・読み手は、その表現を再び解釈学的循環の中で「解釈」することを通じて、その表現者とその精神を共有し、ここでも精神の活力が生まれることとなる。

こうして、「物語」は、ハイデガーが論じたように、現実世界の絶対的な矛盾に置かれながらも、解釈学的循環を為し続ける人間精神の所産であり、かつ、ディルタイやシュライエルマッハーらの論考が示唆するように、人々の解釈の営みを通じて紡ぎ出される「共同的精神の表現」となる。つまり、解釈学の諸議論は、「物語」を語り、そして、耳を傾けるという過程を通して、人々の活力の増進と精神の共同化が促される可能性を示唆している。

4. 物語を活用する実践研究

物語を活用する実践研究には様々なものがあげられるが、物語を積極的に活用しているものとして、少なくとも以下のものがあげられる。

- ①臨床心理学・社会学
- ②経済・経営学
- ③民俗学
- ④公共計画

ここでは、これらの物語の様々な適用事例を、前章、前々章にて紹介した各種の理論との対応関係と共に、概説する。

(1) 臨床心理・社会学

物語を最も積極的に“活用”してきた分野としてまず挙げられるのが、個人や家族を対象とした臨床心理・心理療法の分野である。この方法論は近年では、そうした個人の心理療法のみならず、臨床社会学が取り扱う医療や福祉、教育等の現場にも拡張されてきている。

心理療法の分野では、物語が積極的に導入される以前においては、問題を抱えた個人（クライアント）がいた場合、そのクライアントの心理プロセスや、あるいは、クライアントを含めた家族全体を一つのコミュニケーションシステムとみなし、それらを改変することを通じて問題の解決を図ろうとするアプローチが一般的であった。具体的には、心理療法の対象となるクライアント自身が、自身が抱える問題を自己解決しようとする行動それ自体によって、かえって当該の問題が強化され、維持されていく、という悪循環関係が多くの場合存在していることが認識されているのだが、そうした悪循環を断ち切るための様々な介入方法が検討されてきた。

しかし、こうしたシステム論的なアプローチが必ずしも成功するとは限らず、多くの失敗事例が蓄積された。そもそもこのアプローチでは、「会話」とは独立に「システム」が存在するということを前提としていたのだが、実際には、会話こそが、そしてとりわけ、当該の問題について語り合うということそれ自体が、当該のシステムを作り出しているという側面を配慮していなかったからだという点が、徐々に認識されるようになっていった。それ故、語り合う「セラピー」（心理療法を行う者）と「クライアント」の双方を含む「システム」全体の動学的な関係性に配慮できるようなアプローチが求められていった。そしてその中で提案され、発展してきたのが「物語」（ナラティブ）を活用するアプローチであった^{28) 29) 30) 31)}。そして近年では、そのアプローチの臨床社会学への応用も進められている^{11) 32)}。

こうした臨床心理的なナラティブ・アプローチでは、Gergen & Gergen の指摘^{15) 16) 17)}と同様に、人々は誰でも、自己や家族等についての「自己物語」を持っているという点に着目する。そしてその自己物語は、実は様々なものが成立しうるのだという点にさらに着目する。そしてそうした可能な複数の自己物語の中でも、それぞれの人々が「私とは、あるいは私たちの家族とはかくかくしかじかのようなものなのだ」と「信じている」ところの自己物語を「ドミナントストーリー」と呼称する。このドミナントストーリーが、人々に様々な対象に対する「意味」を付与しているのだが、クライアントが関える「問題」もまた、これによって生じていると考える。臨床心理学・臨床社会学では、「セラピスト」が「クライアント」と会話を繰り返すことで、この「ドミナントストーリー」とは異なる「オルタナティブ・ストーリー」を見だし、前者から後者への転換を促していくことを通じて、問題解決を図ろうとする。

この転換にあたって、重要となるのが、クライアントが持つドミナントストーリーと「矛盾」している様々な経験、あるいは、例外的なエピソード群であると指摘される。セラピストは、その矛盾や例外的エピソードに焦点をあてることを促し、クライアントがより“生きやすい”ストーリーへと自己物語・家族物語を転換させることを促していくのである。

心理療法の分野では、こうしたナラティブ・アプローチによって、それまで物語を前提としていなかったが故に失敗してきた様々なクライアントの問題を“解決”に導くことに成功している。つまり、様々な人々の心理的な問題を、個人や集団についての自己認識は、そもそも物語なのだという点を前提とすることを通じて、解消することに成功してきたのである。

(2) 経済・経営

経営学者の楠木³³⁾は、様々な企業の成功や失敗についての事例を網羅的に分析した結果、企業の成否を分けるのは、「優れた競争戦略ストーリー」を紡ぎ出せるか否かにかかっているという“事実”を“発見”しているという主旨を論じている。この議論は、精神の活力そのものに、その個人の物語が大いに関わっているという解釈学での哲学的議論をそのまま裏付けるものであるということができよう。さらに、そういった自己物語は、心理療法の分野で議論されているように、そして、Miller¹⁹⁾が心理学において論じたように、個人のみならず集団に対しても妥当しうるものであるという主張に符合するものでもある。

そして、その戦略ストーリーの質の高低は、「因果の起こりやすさ（強さ）」「波及効果の多さ（太さ）」「フィードバックループの多さと因果連鎖の長さ（長さ）」の三点に依存しているという点を指摘している。その上で、「強く太くて長いストーリー」であるほど、その企業の企業活動を成功に導きうる「優れたストーリー」であると主張している。そして、そうした主張を裏付ける様々な企業の成功事例の背後に、どのようなストーリーがあったのかを、それぞれ仔細に論じている。

こうした楠木の議論は、一企業の経済活動を対象にしたものであるが、こうした物語の重要性は、一企業に留まらず、一国の経済そのものにも重大な影響を及ぼしうるものである、という点がアカロフとシラーによって指摘されている³⁴⁾。彼らはメキシコの事例を取り上げ、バブル経済の進展やその崩壊、取り付け騒ぎなどの様々なマクロ経済現象の背後に、社会的に共有された「物語」が存在していたことを指摘している。すなわち、バブル経済についての特定の物語が国民の中で共有されたからこそ、バブル経済が進展すると共に、それが一気に崩壊に向かったのだという点が指摘されている。つまりは、そうした物語の共有がなければ、あるいは、彼らが実際に共有した「ドミナントストーリー」とは別の「オルタナティブストーリー」を国民が共有していたのなら、メキシコ経済は全く異なった形で展開したに違いないと考えられるのである。

(3) 民俗学

以上、主として西洋の人文社会科学において物語がどのように議論され、そして、活用されてきたのかについて論じたが、我が国においても“物語”は公共的な目途のために積極的に活用されている。

その代表的な取り組みが柳田国男の民俗学である³⁵⁾。

彼の民俗学は、単に対象とする民俗を分析し、その理解を深めるというための学問ではなく、あくまでも、日本の山村の農民達の貧困を救済する「経世済民」（この世を）を目的として構築されてきた極めて実践的な人文

科学である。その中で庶民が自発的に日々行っている“民間伝承”を促進していくことこそが、農山村の活性化に繋がることを様々な実践を通して明らかにされていた。そしてそのために、それぞれの山村に伝わる口承民話を重視し、民間伝承を促すことを企図し、そうした口承民話を集めていく取り組みを繰り返していった³⁶⁾。

このように、柳田民俗学はあくまでも経世済民を目的とするものであったが、民俗を研究対象とする学問としての傾きが柳田以降強くなったようであるが、柳田民俗学の実践の系譜は、柳田以降も早川、宮本、そして山下らへと、代も受け継がれている³⁶⁾。すなわち、客体である民俗事象を研究することではなく、民俗事象を知ることによってそれを担ってきた人びとの生き方をとらえ、その技能・生活知・共同意識などを「触発」「蘇生」し、生活者自身による現実の卑近な諸問題(例えば転作、地域営農など)の「解決能力を醸成すること」を目的とする学問として、民俗学を捉える民俗学研究が展開されている。そうした民俗学研究により、「解決能力を醸成する」契機は、住民が民俗学者に、その農村の過去や民俗を「物語る」という行為そのものの中にあることが示されている。

この様に、日本の民俗学は、極めて高い実践性を持つものであったが、その基本的な主張は、西洋哲学の系譜における解釈学の諸議論と驚くほどの一致をみせている。すなわち、「物語り」そして、その物語に「耳を傾ける」という人々の間の過程を通じて、話者と聞き手の双方の「精神の活力」が増進するという解釈学の基本的な着想が、そのまま柳田国男の民俗学の取り組みに実践的に活用されているからである。

(4) 公共計画

この様に、「物語」は様々な分野に実践的に活用されてきているが、より大きなスケールにおける都市や地域、国土における土木計画、都市計画などの公共計画の分野においても、その活用がはじめられている。

①まちづくり

公共計画の中でもとりわけ頻繁に「物語り」が活用されているのが、「まちづくり」の文脈である。

例えば、後藤や山崎らは^{37) 38) 39)}、まちづくりに関わる人々の語りを集め、それらの中から、そのまちに於いて共有された物語りとしての“地域遺伝子”を抽出し、それによって、当該コミュニティの将来像の構築を試みたり、あるいは、地域の対外的なPRに活用しようとする試みがなされている。

また、高田^{40) 41)}は、「シナリオ」を作成することで公共計画を進めるアプローチを「シナリオ・アプローチ」と呼称しているが、このアプローチにおけるシナリ

オは、物語としての側面を持っている。シナリオ・アプローチの主な目的は「シナリオを作成する」事を通じて問題認識、問題解決を支援する事である。この手法は大別するとマクロなものとミクロなものがある。前者はシナリオを通して起こりえる未来を的確に認識する事で、不確実性に対処しようとするものである。一方後者は、個人が自らが置かれている環境をよく理解する事を通じて問題解決を図ることに資すると言う点が論じられている。

さらに、延藤は、物語を活用した計画論の可能性について、いくつかの検討を加えている^{42) 43) 44) 45)}。例えば、「まちづくり憲章を短歌で詠む」「まちづくりにおいてロールやルールに着目し、まちづくりの過程を解釈する」というかたちで、まちづくりで物語を活用することで、人々の主体性の向上が見られたり、まち全体を多面的に見る意識が生成する事等を述べている。

また、伊東は、まちづくりにおいて、その街のシンボルを重視した「シヴィック・プライド」を中心としたブランディング戦略が重大な役割を担うことを指摘している⁴⁶⁾。こうしたシヴィック・プライドは、心理学のMillerが論じた”共有された物語”を象徴、あるいは、直接意味するものであり、当該のまちの人々の行動に様々な影響を及ぼしうるものであると考えられる。

防災を中心としたまちづくりにおいても、物語は活用されている。矢守⁴⁷⁾は、実際に震災にあった人々の物語を短くまとめ、それらの物語に触れていく仕掛けをクロスロードと呼ばれるゲームとして構成し、このゲームへの参加を促すことで、様々な人々、ひいては組織、地域の防災力を高めること目指す実践を続けている。ゲームへの参加が、参加者の防災力を高めるのは、実際の震災体験に触れることを契機として、ゲームの中で擬似的に震災を体験することができるからであり、その擬似的体験を通して防災に必要な諸準備を進める諸動機が活性化され、防災計画がより高度化されることが期待されることとなる。

この様なまちづくりへの物語りの活用アプローチは、“計画”という将来に向けた意志的行為に物語を活用するという点に於いてその特徴があり、その点に於いて、“伝承”を重視する民俗学と異なる側面がある。

②土木・建築・都市計画における歴史研究

さらに、これらのまちづくりに関わる物語り研究として、都市計画史研究^{例えは48) 49)}が挙げられる。また、都市というスケールよりもよりミクロな視点における歴史研究として建築史研究^{例えは50) 51) 52)}を、そして、よりマクロな視点における歴史研究としては土木史研究^{例えは53)}、⁵⁴⁾をそれぞれ挙げることができる。これらの諸研究は、都市計画や建築、土木のそれぞれの歴史を書き留めると

いう重要な任務を持つものである。しかし、本稿で触れた歴史哲学の諸研究で明らかにされているように、歴史を記述するという行為そのものが、解釈を通して物語っていくという行為であることから、都市計画、建築、土木の歴史研究はいずれも、新たな解釈を提示し、それを通して、その物語りに触れる人々に解釈学的な影響を及ぼさんとする試みである。そうした立場は、例えば長尾がその著書の冒頭で、なぜ土木史研究に於いて“物語り”を書かざるを得ないと感じたのかという記述に明確に現れている。彼は、土木史を物語りとして論ずることを通してしか伝えられぬ事があるという点を明確に認識したことが、執筆の動機であったことを述べている。

③実践描写研究

公共政策は、それを推進する人物あるいは組織の「良質な実践」があつて始めて推進され、実質的な効果を出現させる。そうした「良質な実践」を、様々な地域や組織において促すことが、公共計画学の課題であるが、これまでの公共計画学研究は、実践を為そうとする人物や組織が活用可能な「理論」や「技術」を開発することが、その主たる仕事であつた。そして、上に述べたまちづくりにおける物語の“活用”の諸研究もまた、計画ヴィジョンを抽出したり、計画策定を支援するための一技術として、物語りの活用が提案されているという傾きを色濃く持つものであつたと言えることができる。

しかし、歴史哲学や解釈学の諸研究がそれぞれ示唆し、そして、民俗学が明確に実践したように、物語り、それに耳を傾けるという社会的コミュニケーション行為そのものが、その物語りに触れた人々の精神や組織、集団の共同精神を高揚させ、活性化させるという効果をもたらさざるを得ないという人文科学的知見が厳然として存在している。先に引用した長尾が直感し、彼の著書の中で触れている土木史における物語描写の不可欠性は、この点にその根拠が求められると言えることができるであろう。

こうした人文社会科学的知見に基づいて、藤井(2008)においては、まちづくりの展開を次のようにとりまとめている⁵⁵⁾。

そこではまず、公共計画の実践を考えた時には、これまでの公共計画研究で多大なる努力が費やされてきた技術や理論の開発が重要であることは論を俟たぬところであるとしても、そうした理論や技術を活用しながら実践を為そうとする「活力」が不在であれば、公共計画が適切に推進されることなどあり得ない、という自明の点が指摘される。ところが、そうした「活力」それ自体を促すことについては、十分な研究蓄積がなされておらず、これこそが、公共計画を考える上で最大の問題となっているとさえ言いうるであろうという点が強調される。そしてこうした問題点に着目し、実践者の「活力」を促す

ためには、「物語」を活用することが重要、あるいは、不可欠なのでは無かろうかと論じられている。なぜなら、

- 1) ある地域で、人々の「活力」によって導かれた成功事例（例えばまちづくり）を、「解釈」を通じて物語化し、
 - 2) それを、公共の場（例えば、論文や発表等）で「物語る」ことで（さらに、その物語の再解釈を改めて提示することで）、
 - 3) その成功体験を、「解釈」し「追体験」するその受け手が現れ、
 - 4) その受け手の内にその成功を自分自身の現場で実践せんとする「活力」（動機）が生まれる、
- という、物語を媒介とした活力伝染過程が生ずると期待されるからである。こうした伝染課程は、心理学における物語に関する様々な心的過程を前提としたものであることはもちろんのこと、ガダマーやディルタイ、シュライエルマッハーが解釈学で論じた社会的な解釈課程を、公共計画の文脈に適用したものであるし、また、実践的民俗学が“出版”という行為をその実践の中に明確に位置づけていることから窺い知る事ができる。さらには、歴史学が、歴史を解釈することを通して構成し、それを出版していくという行為を為さんとするものであることから、窺い知る事ができる。この様に、上記の 1)~4) の物語を媒介とした社会的伝達・コミュニケーション過程は、本稿で概観した物語に関わる様々な人文社会科学の知見を“公共計画”に“活用”したものであるということが出来る。

こうした議論を明確に踏まえた上で、これまでの研究に於いて、「観光カリスマの成功事例」や「まちづくりの成功事例」を、インタビューを通じて物語的に記述し、さらにそれを再解釈した上で、その内容を出版していくということを通じて、上記の活力伝染過程の実践が企図されているところである^{56) 57)}。

5. 既往研究に見る「物語」についての諸相

以上の様に、物語は実に様々な議論や実践が展開されている。それらの中には、明確に、意図的に関連づけられ、相互に影響を及ぼし合っている系譜もある一方で、ほぼ独立に論じられてきた系譜もある。しかし、いずれも「物語」を中心とした議論であることから、仮に独立に議論され、相互影響がないものであったとしても、それぞれ同様の事態を、異なる文脈と言葉で論じているに過ぎないというケースが散見されるのは、既に前章までのレビューを一瞥しても明らかであろう。

ついては、これらの包括的なレビューを踏まえて、物語に関する重要な要素を、「基礎的側面」と「実践的側面」とに分類した上で、いくつか取りまとめることとし

たい。

（１）物語の基礎的側面について

物語の基礎的側面としては、少なくとも以下の５つが挙げられる。

①「物語」は時間軸にそった出来事の選択的構造化である。

物語る事を通じて、全ての出来事の中から一定の基準に従って出来事は選別・取捨選択され、関連づけられる。その結果全体が一つの意味的なまとまりを持ち、個々の出来事に意味や方向性を与える（２．（１）歴史哲学、２．（３）心理学、４．（１）臨床心理・社会学をそれぞれ参照）

②「物語」は、諸種の人間の心的過程（共同体内の社会的過程）の源泉である。

個人における（さらには共同体における）「記憶」や「理解」、そして「自己意識」、さらには様々な物事に対する「意味の付与」や「様々な可能性や矛盾の隠蔽」はいずれも、取捨選択の結果つくりだされる時間性を伴う「物語」があつてはじめて成立する心的／社会的過程である（２．（３）心理学、３．（１）西洋哲学、４．（１）臨床心理・社会学、２．（２）文芸批評を参照）。

③「物語」の基本構造には文化的時代的な普遍性がある。

物語の基本構成には、時代や国を超えた普遍性があり、そのパターンも無尽蔵に存在している訳ではない。そして、そうした基本的なパターンが限られているからこそ、物語を媒介したコミュニケーションが成立するのである（２．（２）文芸批評、２．（３）心理学を参照）。

④「物語」は社会的過程の中で変容し、社会的に共有されていく。

物語は他者に向けて語られ、他者の批判や承認によって変化していく。それゆえ、それぞれの共同体には、その内部に共有された物語が存在している。（cf. ２．（３）心理学、４．（１）臨床心理・社会学を参照）

（２）物語の実践的側面について

以上の物語の基礎的な側面を踏まえながら実践されてきた人間の諸行為における、物語の重要な側面としては少なくとも以下の４つが挙げられる。

⑤「物語の共有」を通じて、まちづくりや国づくりに必要な諸資源の調達が可能となる。

文芸評論研究（２．（２））で明らかにされているように、それぞれの社会・時代は、潜在的なる物語を「共

有」している。そして、その共有された物語が、一つの企業、ひいては、一国の経済やその運営（経営・政治）を大きく動かす原動力となっている（4.（2）経済・経営学参照）。こうした諸種の事実は、ミクロな視点による心理学研究（2.（3））でも裏付けられており、国家や国旗などに象徴される共有された物語が、社会的な行動に多大なる影響を及ぼしていることが知られている。

こうした共有された物語が持つ力は、公共計画の中でもとりわけまちづくり、ひいては国づくりにおいて活用されてきている（4.（4）参照）。そうした公共計画における実践は、必ずしも明示的に上記のような文芸批評研究や心理学研究が引用するものとは言い難いものであるが、そうした既往の人文社会科学の考え方で改めて解釈するなら、それらの取り組みは次のように再解釈できる。すなわち、様々な街や国で進められる多くのまちづくり、国づくりの取り組みの多くは、1) それぞれの街や国に潜在的に共有されている物語を見だし、（シヴィックプライドに基づくブランディング戦略等によって）それを強化し、顕在化させるような取り組みを通じて、2) その街に関わる様々な人々から熱意や労力、さらには、資金等を調達し、3) その街や国を改善する公共事業を展開せんとする取り組みだと再解釈できる。例えば、川越のまちづくりの取り組みは、川越の町衆達が、「蔵づくりの町並み」に象徴される川越の歴史物語を生きた形で後世に引き継がねばならないという思いを共有していること、ならびに、その思いの共有こそが、一人一人の町衆のまちづくりに向けた活力の源泉となっていることが指摘されている⁵⁷⁾。あるいは、一般的な世界中の国々は皆、「国旗」「国歌」そして「建国史」が大切にし、それらを多くの国民が共有的に尊重し、それを守り、よりよきものに改善していかんとする熱意を鼓舞していくことを通して、様々な国家的な取り組みを進めている⁵⁸⁾。こうした川越まちづくりや世界の国々における諸事例は、物語の共有化によって人々の熱意を調達し、それを「資源」として様々な公的な事業を推進しているということの好例だと言うことができよう。

⑥「物語」を巡る社会的過程を通じて人やその共同体の精神が活性化・健全化され得る契機がもたらされる。

この効果は、「聞き手」においても「語り手」においても見られる。

まず、解釈学（2.（1））の議論に基づけば、語られた「成功物語」に触れた「聞き手」は、その物語の解釈の過程で追体験を行い、それを通じて、その登場人物の活力が受け手に伝染することが有り得ることとなる。そうした効果は、公共計画において様々な活用されはじめている。また、ゲームという媒介によってより深く物語に触れることで、より強く追体験・再解釈をする契機が与

えられることもある（4.（4）参照）。

一方、「語り手」側の効果としては、民俗学（4.（3））や臨床心理学・社会学（4.（1））において活用されている。まず民俗学においては「自分物語・共同体物語」を「語る」ことを通じて、その語る主体自身が、忘れかけていたドミナントストーリーを再確認し、精神が活性化する可能性があることが示唆されている。さらに臨床心理学・社会学では、「自分物語・共同体物語」を語ることが、それを語る個人が抱えている「ドミナントストーリー」とは対立する様々な例外事例を見だし、それに焦点を当てることに成功すれば、オルタナティブストーリーへと、自分物語・共同体物語がシフトし、それを通じて、様々な心理的問題が改善、治癒される可能性が実践的に知られている。あるいは、経営学で明らかにされているように、企業の成功を導く背景に、良質な物語が存在していることも明らかにされているところである（4.（2）経済・経営学参照）。

⑦「物語」には、人や社会を成功に導く「力」のあるものと、そうでないものがある。

この様に、物語は、人間や組織、集団の実践に様々な影響を及ぼす可能性を持つものであるが、それはあくまでも「可能性」であって、どのような物語でも影響を持つ、というわけでは決してない。そもそも、民俗学（4.（3））では、かつての自分／自分たちが抱いていたドミナントストーリーを「思い出す」ことこそが、伝承の活力を増進させることができたのであるし、臨床心理・社会学（4.（1））においては、問題を抱えた人／集団が信ずるドミナントストーリーとは整合せず、それ故に諸問題を引き起こしているような諸事実と整合するようなオルタナティブストーリーへと転換しなければ、当初の問題を解消する事などできるはずもない。しかも、そのオルタナティブストーリーが様々な不整合をもたらすものであっては、「元も子もない」様なことともなる。さらに、まちづくりやくにづくりにおいて、物語を通じて様々な資源の調達を図ろうとする場合には、その調達が不能な物語であって、まちづくり・くにづくりに資するようなものとはならない。例えば、国民の協力的傾向を動員しうる物語としてのナショナリズムもあれば、そうでないものもあり得る。そのためにも、例えば文芸批評（2.（2））で論じられているような、その時代・その社会の潜在的な物語、あるいは、ユングが指摘するような集合的無意識（3.（1））を何らかの形で写し取った物語だけが、様々な資源の動員を可能とするものとなり得ると考えられる。

さらに、まちづくり、くにづくり、そして、企業経営といった、何らかの目標を伴う意志的な活動全般を行うにあたっては、自らの意志的活動そのものについて物語

が重要な役割を担う。例えば、成功を導く企業戦略の物語には「強さ、太さ、長さ」がある一方で、それらが高い水準にあるほど、その企業を成功に導きうる力を持つが指摘されている（4.（2）経済・経営学参照）。

⑧「物語」は「結末」「語りだし」をどうするのかで、全く異なったものとなり得る。

この様に物語は様々に語りうるものであるが、そうした可能な物語の中から語るべき物語を選び出すにあたっては、その「結末」として何を据えるべきであるかということが、決定的に重大な意味を担うこととなる。

（2.（1）歴史哲学，2.（3）心理学，4.（1）臨床心理・社会学を参照）。また、そのことは、その物語の「起点」であるところの「語りだし」においても言うものである（2.（2）文芸批評参照）。つまり、物語は、語りだしの内にその結末が臍氣に胚胎されているのであり、かつ、その語りだしを如何なるものとするのかの選択において、その結末についての想定が決定的な影響を及ぼしているのである。それ故、計画的な行為を行うにあたっては、「将来ヴィジョン」として如何なるものを設定するのかによって、「現在において何を為すべきか」の実践のかたちや意味が大いに異なることとなる。

6. 公共計画のための物語について

以上、本稿では、物語についての既往研究の主要な系譜をレビューし、それを総合的に踏まえた結果、それらの諸研究より、物語には以下の8つの基本的特徴があることを指摘した。

- ①「物語」は時間軸にそった出来事の選択的構造化である。
- ②「物語」は、諸種の人間の心的過程（共同体内の社会的過程）の源泉である。
- ③「物語」の基本構造には文化的時代的な普遍性がある。
- ④「物語」は社会的過程の中で変容し、社会的に共有されていく。
- ⑤「物語の共有」を通じて、まちづくりや国づくりに必要な諸資源の調達が可能となる。
- ⑥「物語」を巡る社会的過程を通じて人やその共同体の精神が活性化・健全化され得る契機がもたれる。
- ⑦「物語」には、人や社会を成功に導く「力」のあるものと、そうでないものがある。
- ⑧「物語」は「結末」「語りだし」をどうするのかで、全く異なったものとなり得る。

本研究では、必ずしも全ての物語研究を引用したものではないが、先に述べたように、代表的な物語系譜を概観するものであった。それ故、本研究の第一の成果は、物語研究の主要系譜についての包括的なレビューを踏まえて、こうした8つの物語の基本的特徴を抽出したところに求められると考えられる。

本稿では最後に、こうした議論を踏まえて、物語の公共政策的意義を改めて論じ、これを、本稿の第二の成果として、本稿を終えることとしたい。

これらの8つの論点の内、とりわけ⑤、⑥の論点は、そのまま、公共政策的な意義を意味するものである。

⑤については、公共政策を検討するにあたって、その政策が対象とする地域や共同体において共有された物語を抽出・解釈し、それを軸とした公共計画を検討することが可能となる。そして、実際、その取り組みが、様々にはじめられているのは、既に4.（4）で紹介した通りである。それ故、今後はそうした既往の取り組みをさらに改善、拡大、拡張していく実践を重ねていくことが重要であると考えられる。

一方、⑥については、解釈学（2.（1））でその基本的な理論構成が指摘され、臨床心理学・社会学（4.（1））、民俗学（4.（3））、経営学（4.（2））でその実践が始められているものの、行政等が明確に介入する公共政策の領域においては、一部の例外（矢守⁴⁷⁾、藤井⁵⁵⁾、羽鳥他⁵⁶⁾、澤崎他⁵⁷⁾等）を除いて、十分に検討されていないのが実情である。この取り組みはすなわち、くにつくり、まちづくり、あるいは、公共政策の推進という、「実践の物語」であり、⑤で述べたような、「くにやまちや、地域、社会、組織そのものの物語」とは（大いなる関連性を持ちながらも）峻別されるものである。それ故、この取り組みを進めることで、「より良質な公共政策の推進」、換言するなら「実践者による、より良質な実践の推進」に資することとなるものと期待される。

それ故、今後は、例えば民俗学に代表されるような実践的な人文社会科学のアプローチと同様に、「実践の物語」を描写し、解釈するという「物語行為」を公共政策研究とその実践の中に明確に位置づけていくことが必要であろう。そうした「物語行為」を（例えば、「論文」や「会合」の場において¹⁾）行うにあたっては、本稿で指摘した①から④の基本的な物語の特徴を十二分に踏まえ、⑧の結末や語りだしを如何に設定していくかが重大な意味を持つという点を把握しつつ、⑦に指摘した「物語りの力」を最大限に発揮しうる形を模索していくことが必要である。

脚注

- [1] 例えば土木学会では、そうした論文の場としては土木学会論文集の「F5：土木技術者実践」や「D1：景観・デザ

イン」等が挙げられる。「会合」の場としては、「日本モビリティマネジメント会議」や「土木と学校教育フォーラム」等が挙げられる。

参考文献

- 1) 野家啓一：物語の哲学，岩波現代文庫，2005.
- 2) Mink, L.O: History and fiction as modes of comprehension', In Cohen, R. (ed.) *New Direction in Literary History* The Johns Hopkins Univ. Press., 1974.
- 3) Danto, A.C.: *Analytical Philosophy of History*, The Cambridge Press, 1965. (河本英夫(訳)「物語としての歴史: 歴史の分析哲学」国文社)
- 4) White, H: *Metahistory*, The Johns Hopkins University Press, 1973.
- 5) Ricoeur, P.: *Temps Et Recit* Tomel Edition du seuil, 1987. (久米博(訳)「時間の物語 I」新曜社)
- 6) Polti, Georges: *The Thirty-Six Dramatic Situations*. Franklin, Ohio James Knapp Reeve, 1916.
- 7) 20 MASTER PLOTS (And How to Build Them) Writer's Digest Books, 1993.
- 8) Levi-Strauss: *Anthropologie Structurale*, Librairie Plon, Paris, 1958. (荒川幾男(訳)「構造人類学」，みすず書房)
- 9) Barthes, R.: *L' Mythologies*, Editions du Seuil, 1957 (篠沢秀夫(訳)，「神話作用」，現代思潮社)
- 10) Barthes, R.: *L'aventure Semilogique*, Editions du Seuil, 1985(花輪光(訳)，「記号学の冒険，みすず書房)
- 11) 浅野 智彦：自己への物語論的接近—家族療法から社会学へ，勁草書房，2001.
- 12) Bruner, J: Life as narrative, *Social Reserch* 54(1), pp. 11-32, 1987.
- 13) Bruner, J: *Acts Of Meaning*, Harvard University Press., 1990 (岡本夏木・仲渡一美・吉村啓子(訳)「意味の復権 フォークサイコロジに向けて」 ミネルバ書房)
- 14) Bruner, J: *Actual Mind*, Possible Worlds Harvard UP, 1986 (田中一彦(訳)「可能世界の心理」みすず書房)
- 15) Gergen, K. J. & Gergen, M. M.: Narratives of the Self, In T.R.Sabin & K.E.Scheibe (Eds.), *Studies In Social Identity*, Praeger, 1983.
- 16) Gergen, K. J. & Gergen, M. M.: *Historical Social Psychology*, Earlbau, 1984.
- 17) Gergen, K. J. & Gergen, M. M.: Narrative form and the construction of psychological science, In Sarbin, T.R. (ed), *Narrative Psychology*, Praeger, 1986.
- 18) Schank, C. & Abelson, P.: Knowledge and memory', In Robert S (Ed), *Knowledge and Memory : The Realstory*, Lawrence Erlbaum Assoc Inc, 1995.
- 19) Miller, P.J.: Personal storytelling in every life: Social and cultural perspectives' (Eds.) Robert S, *knowledge and memory : the realstory*, Lawrence Erlbaum Assoc Inc, 1995.
- 20) Lave, J.& Wenger,E.; *Situated Learning : Legitimate peripheral participation.*, Cambridge University Press, 1991. (佐伯胖(訳)状況に埋め込まれた学習，産業図書)
- 21) ウィトゲンシュタイン (著)・藤本隆志 (訳) (1976) 哲学探究 ウィトゲンシュタイン全集第8巻、大修館書店.
- 22) マルティン・ハイデッガー (著), 桑木 務 (訳) 存在と時間, (上) (下), 岩波文庫, 1960.
- 23) W. ジェイムズ (著), 梶田 啓三郎 (訳) (1957) プラグマティズム, 岩波文庫.
- 24) 河合 隼雄 : ユング心理学入門, 培風館. 2010,
- 25) シュライエルマッハー (著), 久野昭, 天野雅郎 (訳): 解釈学の構想, 以文社., 1984.
- 26) ディルタイ (著), 久野昭 (訳) (1981) 解釈学の成立, 以文社.
- 27) ハンス・ゲオルク・ガダマー (著), 轡田 収 (訳): 真理と方法—哲学的解釈学の要綱, 法政大学出版局, 2008.
- 28) White, M. & Epston, D.: *Narrative Means to Therapeutic Ends*, Dulwich Center Publication, 1990 (小森康永「物語としての家族」金剛出版)
- 29) ミシェル・L. クロスリー 2009 ナラティブ心理学セミナー—自己・トラウマ・意味の構築, 金剛出版.
- 30) 江口 重幸: ナラティブとケア 第1号——特集: ナラティブ・ベイスト・メディシンの展開, 遠見書房, 2010.
- 31) やまだ ようこ: 質的心理学の方法—語りをきく, 新曜社, 2007.
- 32) 野口 裕二: ナラティブ・アプローチ, 勁草書房, 2009.
- 33) 楠木建: ストーリーとしての競争戦略 —優れた戦略の条件, 東洋経済新報社, 2010.
- 34) A. Akerlof & R. Shiller: *Animal Spirits: How Human Psychology Drives the Economy, and Why It Matters for Global Capitalism*, Princeton Univ Pr, 2009 (山形 浩生「アニマルスピリット」東洋経済新報社).
- 35) 例えば, 柳田国男: 遠野物語, 集英社文庫, 1991.
- 36) 山下 裕作 (2008) 実践の民俗学—現代日本の中山間地域問題と「農村伝承」, 農山漁村文化協会.
- 37) 山崎義人, 後藤春彦, 佐久間康富, 田口太郎: まちづくりオーラル・ヒストリー—個々人の口伝の人生を積層させることから社会的文脈を出現させる試み—, 都市計画, v277, 35-40, 2009.
- 38) 中神賢人, 後藤春彦, 田口太郎, 山崎義人: 口述史調査記録のデータベースシステムの開発に関する研究, 日本建築学会技術報告集, vol20, 301-306, 2004.

- 39) 山崎 隆之, 十代田 朗: 「物語」を用いた地域PRの取り組み内容に関する研究, 日本都市計画学会都市計画論文集, vol41-3, 433-438, 2006.
- 40) 高田光雄, 大石裕也: シナリオ・アプローチによるワークショップ手法の開発—ニュータウン再生計画に向けたシナリオ・アプローチによるワークショップ手法の開発—その1, 日本建築学会大会学術講演梗概集, 235-236, 2004.
- 41) ヨムチヨルホ, 高田光雄: 大規模分譲住宅の団地再生におけるシナリオ・アプローチを用いた意志決定支援手法に関する研究, 日本建築学会計画系論文集, vol608, 119-126, 2006.
- 42) 延藤安弘, 小杉学, 名畑恵, 野々村聖子: 表象性、物語り性としての「第三空間」—「物語り計画学」の可能性の考察(1)—, 日本建築学会大会学術講演梗概集, 999-1000, 2007.
- 43) 名畑恵, 延藤安弘, 小杉学, 野々村聖子: 短歌を用いたまちづくり憲章策定におけるケーススタディー「物語り計画学」の可能性の考察(2)—, 日本建築学会大会学術講演梗概集, 1001-1002, 2007.
- 44) 野々村聖子, 延藤安弘, 小杉学, 名畑恵: まちなみ景観を守り育む自発的住民活動におけるロールとルール—「物語り計画学」の可能性の考察(3)—, 日本建築学会大会学術講演梗概集, 1003-1004, 2007.
- 45) 名畑恵, 延藤安弘, 小杉学: 物語り計画におけるナラティブ・プランナーの位置づけの考察—ナラティブ・プランナー／パーソンの技術・哲学に関する研究(1)—, 日本建築学会大会学術講演梗概集, 1085-1086, 2008.
- 46) 伊藤香織 (監修), 紫牟田伸子 (監修), シビックプライド研究会 (編集): シビックプライド—都市のコミュニケーションをデザインする, 宣伝会議, 2008.
- 47) 矢守 克也: アクションリサーチ—実践する人間科学, 新曜社, 2010.
- 48) 中島直人: 都市美運動—シヴィックアートの都市計画史, 東京大学出版会, 2009.
- 49) 石田頼房: 日本近代都市計画史研究, 柏書房, 1992.
- 50) 福井次郎: 橋梁設計技術者・増田淳の足跡, 土木史研究論文集Vol.23, 2004.
- 51) 鈴木博之 (編著): 近代建築史, 市ヶ谷出版社, 2008.
- 52) 稲垣栄三: 近代建築史研究, 中央公論美術出版, 2007.
- 53) 高橋裕: 現代日本土木史 第二版, 彰国者, 2007.
- 54) 長尾義三: 物語日本の土木史, 鹿島出版会, 1985.
- 55) 藤井 聡: 景観改善の「物語」とその「伝染」について, 都市計画, 57 (6), pp. 21-24, 2008.
- 56) 羽鳥 剛史・藤井 聡・住永 哲史: “地域カリスマ”の活力に関する解釈学的研究: インタビューを通じた「観光カリスマ」の実践描写, 土木技術者実践論文集, 1, pp. 122-136, 2010.
- 57) 澤崎 貴則・藤井 聡・羽鳥 剛史・長谷川 大貴: 「川越まちづくり」の物語描写研究—伝建地区指定に至るまちづくり史— (準備中)
- 58) 中野剛志: 経済はナショナリズムで動く—国力の政治経済学, PHP研究所, 2008.

(2010.X.X 受付)

ACADEMIC GENEALOGIES WITH RESPECT TO NARRATIVE IN HUMAN AND SOCIAL SCIENCES AND THEIR IMPLICATION FOR PUBLIC POLICIES

Satoshi FUJII, Taiki HASEGAWA, Takeshi NAKANO and Tsuyoshi HATORI

In human and society science, narrative is regarded as an important issue to understand dynamic actions of human being and society. Therefore, narrative is also expected to be important for public policies that try to improve dynamic actions of human being and society. In this study, we review academic genealogies with respect to narratives including western philosophy, hermeneutics, historical science, historical philosophy, literary criticism, clinical psychology and sociology, narrative psychology and folklore. Then we discuss how narrative can be pragmatically applied for public policies.